

観光地・上高地の形成過程と国際観光委員会における議論

THE DEVELOPMENT PROCESS OF KAMIKOCHI AND DISCUSSIONS IN THE COMMITTEE OF TOURIST INDUSTRY

砂本文彦 —— *1

Fumihiko SUNAMOTO



*1

In 1930, the Government established the Board of Tourist Industry and the Committee of Tourist Industry to attain foreign currency. They had discussed what they should do to construct resorts for foreign tourists, and chosen intensive resort area. The aim of this paper is to make clear states of developments of Kamikochi, where they had chosen.

Developments of Kamikochi had begun opening ground and road for power stations. Therefore, members of the Board and Committee had regarded Kamikochi as a mountain resort. They, especially Gyoji Arai and Kishichiro Okura, had tried to promote to improve roads and a hotel.

キーワード：
上高地, 国際観光委員会, 宿泊施設, 道路

Keywords:
Kamikochi, Committee of Tourist Industry, Hotels, Roads

1. 序

1.1 はじめに

1930年代は悪化していた対外貿易収支を改善するための外国人観光客誘致が注目されていた時期であり、彼らを受け入れるための観光地整備が要請されていた。本報告で取り上げる上高地もその例外ではなく、少数の登山者のための「秘境」から、「国際観光地」への脱皮が期待されていた。この議論の顛末は著者が入手した国際観光委員会¹⁾会議議事録²⁾に克明に記録されている。

本報告は関連文献から1920年代から30年代にかけての観光地・上高地の形成過程を把握し、その要因を明らかにするとともに、国際観光委員会の会議議事録に収められている上高地の観光開発に関する委員の発言³⁾を分析することで、上高地の観光開発と国際観光政策との関連性を明らかにするものである。現代においても代表的な観光地である上高地の観光開発の軌跡を辿ることは、今後の国際規模に展開するリゾート開発に適切な方向性を与えると思われる。

1.2 上高地前史

標高1,500mに位置する上高地が観光地として注目を浴びるのは、英国人宣教師ウォルター・ウェストンが記した『日本アルプス-登山と探検』といわれる。ウェストンは1891年に徳本峠を越えて上高地に辿り着き、その風景を多くの人々に紹介するきっかけとなった。ウェストンは牛番小屋に宿泊したと記述しているように、当時の上高地では人里離れたそのなだらかな地形を利用して放牧が行われ、観

光地としての性格は乏しかった。上高地はもともと「神河内」「上河内」と呼ばれ、1906年に加藤惣吉が開設した上高地温泉を端に、現在の観光地のイメージを醸し出す「上高地」と記述されるようになった⁴⁾。上高地へは徳本峠越えのルートしかなく、当時は専ら登山準備地としての価値が見出されていたに過ぎない。

2. 観光地「上高地」形成への背景

2.1 電源開発に伴う道路整備

上高地が観光地としてのポテンシャルを高めるのは、長距離送電の可能となった1910年以降の電源開発(ダム→水力発電)に伴う道路整備が契機となっていた。当時は都市部の電力需要の増加から日本中の渓谷がダム建設候補地として計画され(上高地、十和田、黒部、帝釈峡等)、上高地周辺も水力発電所建設のための道路整備が進んだ。1924年には京浜電力によりダム建設計画⁵⁾が、1926年には梓川電力による計画が打ち立てられた⁶⁾。

1920年代後半からは、ダムサイトへ向けての道路建設が行われ、島々-奈川渡間には京浜電力により、奈川渡-大正池間は梓川電力により取り組まれた(図1、図3)。この道路開通により、1929年から比較的広幅員であった島々-中ノ湯間に乗り合いバスが運転を始め⁷⁾、上高地へのアクセシビリティは飛躍的に向上し、多くの観光客が訪れるようになった。電源開発に伴う道路整備が上高地の観光地化に拍車をかけたのである。

*1 高知工科大学工学部社会システム工学科 助手・修士(工学)
(〒782 高知県土佐山田町宮ノ口)

*1 Research Assoc., Dept. of Infrastructure Systems Eng., Faculty of Engineering, Kochi Univ. of Tech., M. Eng.

表1 上高地観光開発関連年表

西暦	上高地観光開発関連年表(近代期) ◎行政関係、○道路・交通、●温泉・宿泊施設、△ダム
1884	奥原甚三他四人による上高地牧場が開設
1890	このころより上高地で牛馬の放牧が行われる
1892	ウォルター・ウェストンが上高地を訪問
1904	● 加藤惣吉が上高地温泉を開設
1906	株式会社上高地牧場設立
1912	● 河童橋畔に旅館養老館開業 (五千尺旅館の前身)
1915	焼岳噴火により梓川が堰き止められ、大正池ができる
1916	◎ 上高地一帯が保護林に指定
1918	○ 上高地内梓川右岸沿いの道を上高地温泉株式会社が造成
1921	◎ 国立公園候補地調査 (内務省) 帝国議会に「長野県下上高地ニ国立公園設置ノ請願」(貴族院)、「上高地国立公園設置ノ請願」(衆議院)を提出。
1922	衆議院にて「日本アルプス山中上高地(神河内)ニ国立公園設定ニ関スル建議」が行われた。
1923	● 旅館清水屋が上高地温泉から独立営業開始 ● 中ノ湯温泉開業
1924	△ 京浜電力が上高地河童橋付近にダム建設計画立案 △ 庭園協会がダム建設に反対して「上高地国有保護林内貯水池設置ニ関スル意見」書を大臣、知事に提出
1925	△ 上高地問題研究会設立
1926	△ 梓川電力がダム建設計画立案
1927	日本新八景に指定(主催東京日日新聞社、大阪毎日新聞社) ○ 梓川電力により沢の渡-上高地間に九尺幅の道路建設
1928	◎ 上高地一帯が名勝天然記念物に指定 (内務省)
1929	○ 水力発電用道路が中ノ湯まで竣工し、バス運転開始
1930	◎ 国際観光局、国際観光委員会設置
1931	「山の座談会」開催 ◎ 国立公園法制定
1933	◎ 大蔵省資金の融資を受けた上高地観光ホテル開業 ○ 乗合バスが上高地まで乗り入れ開始
1934	上高地牧場閉鎖 ◎ 上高地一帯が中部山岳国立公園に指定

*本表は脚注・参考文献欄の記述をまとめて作成したものである。

2.2 国立公園候補地と日本新八景の選定

電源開発に伴う道路整備というハード面だけでなく、上高地の名声を高めていく動きが起こった。1921年に活発になった上高地への国立公園指定へ向けての動きである。同年の第45回帝国議会には、貴族院に「長野県下上高地ニ国立公園設置ノ請願」、衆議院に「上高地国立公園設置ノ請願」が提出され、翌年には衆議院にて「日本アルプス山中上高地(神河内)ニ国立公園設定ニ関スル建議」が行われた⁹⁾。政府側も同年から内務省衛生局による国立公園調査を開始し、上高地は最初に調査が行われた⁹⁾。後にまとめられた『国立公園候補地調査概要』¹⁰⁾によると、上高地の国立公園としての素質は「天下ノ絶勝」で「本州ノ中央ニ当リテ東京、大阪ヨリ等シキ距離」にあると、その固有の景観と地理条件の良さが指摘され、「最モ適当ナル候補地ノタルヲ失ハズ」とされ、国立公園に指定されるのも時間の問題であった¹¹⁾。上高地におけるこのような動きは、国立公園の目的、「…我が国天ノ大風景ヲ保護開発シ…国民ノ保健休養…外客誘致ニ資スル…¹²⁾」に照らすならば、その公園区域における自然保護と開発という一見相反する側面を持ち合わせることとなり、上高地の風景保護が課題となる反面、外客を受け入れる国際観光地建設の場として脚光を浴びるという皮肉な効果をもたらすものだった。

だが、これらの国立公園指定に向けて動いていた1920年代に、その後の上高地の観光地形成に直接的な影響を与えた具体的な施策が行われたとは言い難い。その一因としては国立公園行政から施策が本格的に行われるには、1931年の国立公園法制定を待たなければならなかったことがあると思われる¹³⁾。

他にも、日本の観光地を認識させる動きとして1932年の日本新八景の選定¹⁴⁾を挙げることができる。日本新八景とは新聞社が主催となった観光地ランキングで、国民的なブームとなった。その内容は「山岳、渓谷、瀑布、温泉、湖沼、河川、海岸、平原につき、各景ごとに推薦投票、最高点順十位づつを候補地」として、審査委員会と一般投票により決定し、「昭和の新時代を代表すべき新日本の勝景」を選定しようとしたもので、上高地は渓谷部門で日本新八景の座をついた。このことから推察されるように観光地・上高地は既に国民の間にその存在が認識されていたのであり、日本新八景の選定をうけて更にそ

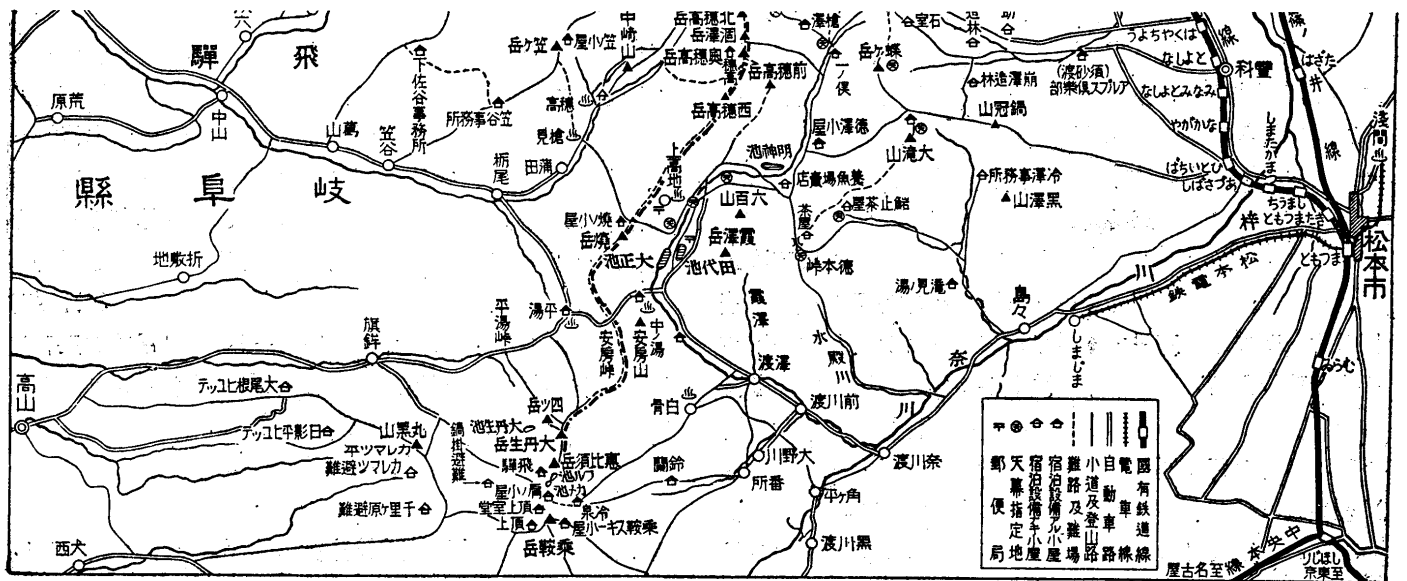


図1 上高地周辺図 出典:鉄道省:鉄道旅行案内「日本北アルプス」、1936

の存在は知られることとなったのである。このような結果に到ったのはひとえに、前述の道路整備によるアクセシビリティの改善が、登山者を招き入れ、その見聞録が広く伝えられたことによる。

3. 国際観光委員会議事にみる上高地観光開発思想

3.1 国際観光政策における上高地開発の意義と施設整備項目

国際観光委員会の議事録によると、委員会では外国人観光客誘致のための重点整備を促進する優先順位付き(ABC ランク)の重要観光地点リストを作成していた¹⁶⁾。リスト中、上高地は B ランクに位置づけられ、観光収入による外貨獲得の一翼を担う観光地としての展開が期待されたいたのである。上高地は、当時の登山ブームが後押しするかたちとなって、関東と関西の中間(横浜、神戸からの中間)に位置し¹⁶⁾、外国人登山客を一手に引き受けることのできるポテンシャルの高い観光地として認識されていたと思われる。

国際観光委員会第二部特別委員会第六回会議(1931年9月16日)で、国際観光局庶務課長長崎惣之助から、将来の山の在り方についての報告¹⁷⁾とこれに関する議論が行われ、その話題は上高地の観光開発が中心となった。これをうけて同局長新井堯爾、国際観光委員会委員で帝国ホテル会長大倉喜七郎、同委員で都ホテル会長藤村義郎、長野県知事等が、上高地へ視察に訪れ、会議で上高地の開発手法に関する各自の見解を示した¹⁸⁾。上高地の開発に対する彼らの構想は、具体性を帯びたもので、外国人観光客を受け入れるための施設整備として、新たなホテル施設と、アクセス道路の確保が検討された。

3.2 滞在型観光地形成のための宿泊施設整備

新井の報告¹⁹⁾によると、当時の上高地には宿泊施設が三軒あり、それぞれ以下の特長を持っていた。

五千尺旅館	河童橋側で景色良好
上高地温泉ホテル	温泉あり
清水屋旅館	電気あり

これらの施設は「三軒共ソレゾレ特徴ヲ持ツテ、商売敵トシテ喧嘩」しており、「上高地ノ発展ノ上ニ大変困ル」とされ、委員の概ねの意見としては、これらの施設の経営体質は、国際観光政策上、百害あ

って一利なしと捉えられていた。また、新井は会議の席上、長野県に対し、これらを「買収スルトカ、何トカシテ処理スル方法」を考案するように要請し、宿泊施設整備と併せて道路の問題も検討させていることも明らかにした。施設整備に際して低利融資等の必要性があるのならば、委員会として「何トカ考ヘテ見ヤウト云フコトヲ約束」する等、いわば新井は既にこの地にホテル、道路を建設し、多数の観光客を呼び寄せ、長期滞在できるような一体的な開発を行うことを構想していたのである。

大倉は上高地の印象²⁰⁾について、中ノ湯から大正池までの景色は「日本在来ノ渓谷美」で、他の景勝地と変わらないものだが、大正池から先については、「全ク今マデ日本デ見マシタ景色トハ違ツテ」いるとして絶賛した。彼の言動からは上高地への肩入れの様子が伺え、上高地の観光開発に対して、ホテル事業者として積極的に関与する準備がある態度を滲ませるものだった。また、当時、上高地に建ち始めていた「カフェー二類似」した店舗が林立していく様子に「俗化ノ方ヘ行クノデハナイカ」と、吐露し、観光関連施設の質の低下を憂んだ。また、大倉は上高地を開発する際、「ドウシテモーツノホテルハ必要」²¹⁾であるとし、外国人観光客を受け入れる宿泊施設の必要性を訴えた。また、若者が上高地でキャンプを行うことは、保健衛生上、景観上、好ましいことではなく、スチューデント・ルームを持ったホテル、ないしはバンガロー施設を整備することが適切である²²⁾とも指摘した。大倉もまた、上高地の観光開発に対する明快なヴィジョンを抱いていたのである。

3.3 アクセス道路建設案にみる委員の観光開発に対する態度

上高地への多くの来客を可能とするための第一条件として、国際観光委員会・第二部特別委員会第六回会議では、特に自動車道路整備が検討された。本節では同会議の議事からアクセス道路建設案にみる委員の観光開発に対する態度を概観する。

前述のように電源開発に伴う道路整備は進行していたものの、観光に供する道路、即ち、「自動車走行」に耐えるだけの道路整備は進展しておらず、観光客の往来に不便をきたしていた。会議では、既に上高地に外国人を宿泊させるだけのホテルを建設することが必要視されていたが、その建設資材搬入やその後の利用客のためのアクセス

現状	島々 ———— 中ノ湯 ———— (釜隧道) ———— 大正池 ———— 上高地温泉 ———— 河童橋 ←<電力会社設営>→ ←<電力会社設営> → ←<小径> → ←<小径> →
鈴木石垣知事案	島々 ———— 中ノ湯 ———— 釜隧道 ———— 大正池 ———— 上高地温泉 ———— 河童橋 ←<電力会社設営>→ ← (県道移管後道路改良) → ← (小径を残して迂回路建設) →
藤村委員案	島々 ———— 中ノ湯 ———— 釜隧道 ———— 大正池 ———— 上高地温泉 ———— 河童橋 ←(自動車通行止)→ ← (自動車通行止) → ←<小径> → ←<小径> →
大倉委員案	島々 ———— 中ノ湯 ———— 釜隧道 ———— 大正池 ———— 上高地温泉 ———— 河童橋 ←<電力会社設営>→ ← (県道移管後道路改良) → ←<小径> → ←<小径> →
藤村委員妥協案	島々 ———— 中ノ湯 ———— 釜隧道 ———— 大正池 ———— 上高地温泉 ———— 河童橋 ← (舗装改良) → ← (県道移管後道路改良) → ←<籠あるいはチェアーで連絡> →
実施された道路建設	島々 ———— 中ノ湯 ———— 釜隧道 ———— 大正池 ———— 上高地温泉 ———— 河童橋 ←<電力会社設営>→ ← (県道移管後道路改良) → ← (帝国ホテルにより別の道を通す) →

凡例：——— 自動車通行可能 (広幅員)
——— " (狭幅員)
----- 自動車通行不能 (狭幅員)
----- " (小径など)
< > 現状維持
() 要改良

*本図は第二部特別委員会第六回会議において議論された各委員の道路整備案を図にしたものである。国際観光局編：第二部特別委員会第六回会議事録、1931。
*道路改良の度合いについては、各委員の発言から、最も適切なレベルを判断した。
*鈴木石垣知事案は、「宿屋」まで迂回路を建設するとしている。宿屋は三軒存在したが、うち二軒が上高地温泉側、一軒が河童橋側にあった。本稿では再遠方の河童橋までと判断した。
*大倉案の発表は藤村の強硬な道路建設反対論の後のため、藤村に配慮して大正池までにしたと思われる。元来、大倉は「ホテル経営上道路ハ上ノ方マデ付ケ」るべき立場だった。

図2 第二部特別委員会で議論された上高地道路整備案



図3 上高地地形図(1930) 1:75000

道路建設という側面からも道路整備に対する各委員の意見が聞かれた。その概要を要約したのが図2である。大倉をはじめとする大半の意見は、大正池までの自動車道路の整備を必要視しており、このことは藤村を除いて、コンセンサスが確立されていた。もはや、この問題は自動車道をどこまで通すのかを、大正池までか、更に上高地温泉までか、更に先の河童橋までかが検討されようとしていた。例えば、長野県の鈴木、石垣両知事の構想は、最遠の河童橋まで迂回路を建設して、自動車道を延伸するべきだとしていた(図2)。

しかし、藤村はこれらの一切の立場に強硬に反対した。藤村は、他の委員より一足先に上高地を訪れ、松本から軌道が通じている島々から先は「自動車無用」という印象を抱いていた。その理由として、自動車の走行により塵を飛ばすとか、歩行者の邪魔になる点を挙げると同時に、ホテル建設やその経営上、荷物を運ぶための自動車道路が必要とした意見に対しても、「荷物ヲ運ブ便不便ト云フガ如キ問題デハナイ」と言い切った。更に、「自動車デ以ツテホテルマデ横着ケニシナケレバ気が済マヌト云フヤウナ御客サンハ、上高地へ来テ貰ハナクテモ宜イ」と、実業家らしからぬ姿勢を露わにした。更に、自動車が山深く分け入っていくことに関して、「ソレコソ山霊ガ何ト云フコトカ」とまでも言った。だが、どうしても道路を建設することが避けられないのならば、大正池までは自動車が入れるようにすることは仕方ない(図2、藤村妥協案)とした。とはいえ、大正池から先に関しては「自動車ノ警笛ノ音ヲサセルト云フ其ノコトガ既ニ間違」っており、閑寂の気分を台無しにするとして、断じて大正池より先の道路建設を許すわけにはいかないという態度をとった。これに対する彼の代替案として、大正池より先を連絡するのに「籠」或いは「チェヤー」の設備を施すことを提案した。当時の観光地開発が観光客の利便性のみを踏まえた自動車道や軌道等の大量輸送手段整備を志向していたことを考えるならば、彼の意見は観光資源である自然と人間の行う観光行動との妥協点を探ったという点に於いて注目に値する。

大倉は、藤村の強硬な自動車道建設反対論の後にも、「大正池ノ辺ニ自動車ノデクラ造ツテ、ソコラ自動車ノ最終」としたいと念を押し、自動車道建設は必要不可欠であるとの考えを示した。この議論の展開から、国際観光局、長野県、大倉の三者と、藤村委員の間で上高地開発に対する認識の違いが鮮明となった。県側は上高地の開発に積極的であり、大倉もまた、藤村に配慮したとはいえ、これに準じていたのである。だが、藤村は、何よりも「自然ヲ保持維持シタイ」とする立場から、開発には極めて慎重な姿勢をとるように主張していた。

上高地の観光開発を考えると、大倉らの立場は、開発に傾注した態度であり、一方、藤村は、人や車やらが山に入れば、如何せんとしても、自然が失われてしまうという現実があるという「積極的な」反開発論者であった。結局、大倉が率いる帝国ホテルが上高地にホテルを建設することになるのだが、この大倉、藤村の観光地開発に対する態度の差が、彼らの国際観光政策に伴う国際観光ホテル建設事業に関わる頻度の差²³⁾に反映されたと考えられる²⁴⁾。

4.長野県と大倉喜七郎による開発／国際観光地へ

以上より、長野県(以下、県)と大倉は上高地の全面的な観光地開発に乗り出したといっても語弊はないだろう²⁵⁾。事実、県と帝国ホテルは国際観光局等政府関連機関と「上高地ホテル」²⁶⁾建設関連事業に取り組み、上高地の観光開発は大きく前進した。当時の一連の観光開発が、現在に至る観光地・上高地の形成を促したのである。以下にその詳細な開発の経過を概観する。

県による上高地へのホテル建設計画には、当初、県知事石垣倉治は消極的だったが、新井らがホテル建設に賛意を示して、石垣も建設に前向きな姿勢をとるようになった²⁷⁾。大倉が、所用で長野県に立ち寄った際、石垣は正式にホテルの建設と経営委託を申し入れ、計画は一気に進展した²⁸⁾。その内容は、ホテルは長野県の所有とし、帝国ホテルは県当局の委託を受けて、その建設と竣工後の経営を行うもので、財源は国際観光局等の斡旋のもと、大蔵省からの低利融資を仰ぐ計画であった²⁹⁾。大倉は先にも見てきたように上高地に対して詳細な見聞をしており、上高地の観光地としての価値、必要とされるホテルの概要、アクセス道路整備方法を具体的に指摘していた。いわば、県によるホテル建設の提案は、大倉にとってリスクを負わない事業拡大であり、歓迎すべきものであったといえよう。

1933年3月28日、ホテル調査会において「上高地ホテル新設の件」が付議決定され、帝国ホテルと県の間で仮契約が締結され、翌月5日には、県知事石垣倉治の名のもと、大蔵省へ融資申請した³⁰⁾。運用委員会による融資の決定が同年5月12日に行われ、25万円の融資が決定³¹⁾し、敷地は大正池畔から田代橋を経て河童橋に至る一帯の中から、霞沢山麓に連なる中ノ瀬の高台6,000坪に見当をつけた³²⁾。5月中には着工し、収容人員200人、総工費は30万円(内5万円を帝国ホテルが出資)で、設計は高橋貞太郎、施工は大倉土木の協力の下、帝国ホテル直営で行われた³³⁾。大倉は帝国ホテル会長であると同時に、大倉土木(現・大成建設)の会長でもあり、ホテルの経営と建設を行える人物で、他の実業家とは一線を画した国際観光政策によるホテル整備を強力に推進することのできる存在だった。

ところで、上高地ホテル建設に際す計画段階において、先に見た県と大倉(帝国ホテル)による道路整備が実施された。帝国ホテル支配人の犬丸徹三も、中ノ湯温泉から釜淵道を経て大正池までの電力会

社が建設した道路と、その先の上高地までの小径が、自動車通行に耐えられるようなものに改修するべきであると指摘した³⁴⁾。このことは県と帝国ホテルの交渉にも影響を与え、犬丸はホテル建設の引き替え条件として、県による釜淵道よりホテル建設地に至る県道の改良を挙げ³⁵⁾、県はこの意向を受けて、ホテル起工までに中ノ湯より大正池に至る電力会社の私道を県に移管し、改修を行ったのである。また、大倉の率いる帝国ホテルは上高地ホテルの建設資金の一部(30万円)をもって、大正池から中ノ湯を過ぎて河童橋に至る道路(費用5万円)を開墾して県に寄付し、この時から自動車による上高地入りが可能となったのである。このように、帝国ホテルと県が協力して上高地周辺の道路整備を進展させたのである³⁶⁾(図2実施案)。

この過程において、藤村の意見は何ら反映されることはなかった。その一因として、新規ホテル事業の経営者に帝国ホテルが選ばれたこともあるが、藤村が1933年11月に逝去したことが大きく起因していると思われる。

彼らによる道路整備により1933年には松本-上高地間にバスが運行し始め、上高地への往来は誰にとっても容易なものとなり、上高地の観光地化は頂点を迎えた。翌年の1934年には年間53,629人の登山者が上高地を訪れた³⁷⁾。

5 結

本報告は以下の点を明らかにした。

- ①都市部の電力需要の増加が上高地周辺のダム建設を促進し、これに伴ってアクセス道路が建設され、上高地の観光地としてのポテンシャルは増大した。
- ②対外収支改善のための外国人観光客誘致政策(国立公園制定運動と国際観光政策の両側面から)で、上高地の観光開発の重要性が認識された。
- ③国際観光政策の関係者の間で、上高地を国際的な水準を持った観光地、マウンテンリゾートにするための宿泊施設整備の必要性が認識され、宿泊施設整備と観光に供するアクセス道路建設が懸案事項となった。
- ④上高地の観光開発には、国際観光委員会委員であり、帝国ホテル会長であった大倉喜七郎の意向と、観光地整備を積極的に推し進めた時代背景(国際観光局等の観光関連機関の存在とホテル建設資金融資制度の創設)が大きく寄与していた。

謝辞

本研究を進めるにあたり、加藤彰一豊橋技術科学大学助教授、西澤泰彦名古屋大学助教授から貴重なご助言を頂いた。また、本研究の一部は笹川科学研究助成金により行われた。記して感謝の意とします。

脚注・参考文献

- 1) 政府は外客誘致に関する事項を司る中央機関として、1930年4月24日付勅令第83号を以て鉄道省の外局として「国際観光局」を設置した。これに伴って、鉄道大臣の諮問機関として1930年7月2日付勅令第130号により設置されたのが「国際観光委員会」である。これらの組織は国際観光を専門に扱う日本で初めての政府機関であり、政策的に国際観光収入を増収に転じ、貿易収支を改善することが期待された。同委員会の組織とその概要については、砂本文彦他1名：国際観光委員会の組織(諮問第一号関連)と国際観光政策、建築学会東海支部研究報告集第35号、pp.805～808、1997.2、に詳しい。ちなみに、国際観光委員会の英文名は、財団法人国際観光協会の機関誌「国際観光」3巻2号に収められている当時の田誠国際観光局長の英文寄稿文「Tourist Industry is Polygonal」に国際観光委員会をCommittee of Tourist Industryと表記しており、拙稿もこれに準じた。
- 2) 国際観光局編：諮問第一号特別委員会議事録(第二回～第三回)、1930、同：国際観光委員会の答申(諮問第一号関連)、1930、同：国際観光委員会議事録(第

一回～第五回)、1930・1931、同：第一部特別委員会議事録(第一回～第六回)、1930・1931、同：第二部特別委員会議事録(第一回～第七回)、1930・1931、同：第四部特別委員会議事録(第一回～第五回)、1930・1931。これらの文献から、国際観光政策に関する総合的な知見を得ている。

- 3) 本報告で取り扱う上高地に関する議論は、主として、国際観光局編：第二部特別委員会第六回会議事録、1931に収められている。
- 4) 月刊観光1979年1月号、pp.34～41
- 5) 京浜電力の計画は堰提高45m、延長700mの大計画で、ボーリング調査を行う等実施段階に入っていたが、風景保護の高まり(1924年の庭園協会の意見書等)から中止となった。梓川電力の計画も同様に風景保護の観点から縮小され、大正池の現状を変えない堰堤が1927年に建設された。田中正大：日本の自然公園、相模書房、p.229、1981
- 6) 京浜電力、梓川電力は梓川水系の電力を神奈川県に供給送電(送電は横浜電気)していた。新田宗雄：東京電燈株式会社開業五十年史、東京電燈株式会社、1936
- 7) 注4)と同じ。
- 8) 丸山宏：近代日本公園史の研究、思文閣、p.302、1994
- 9) 白馬山、日光、温泉ヶ岳、阿蘇山も同年に調査が行われた。前掲書8)、p.294
- 10) 内務省衛生局編：国立公園候補地調査概要、1930
- 11) 1934年に中部山岳国立公園として指定された。
- 12) 1931年制定国立公園法理由書
- 13) 上高地における観光開発計画が、国立公園法発布前の1920年代に検討された可能性は充分にある。だが、本稿では、現在へと引き継がれている上高地の観光地形成に直接与えた影響を概観するために、次章に述べるような国際観光行政側、国際観光委員会を中心とした議論から上高地の形成を読み解くものとする。
- 14) 昭和日本の新たな景勝地を見いだす運動である。東京日日新聞社、大阪毎日新聞社主催、鉄道省後援で、投票総数は9,348万票にもなった。1932年4月に日本新八景は発表された。なお、既に観光地としての地位を獲得していた瀬戸内海、琵琶湖、阿蘇、富士山等は対象外とされた。東京日日新聞社：東日七十年史、東京日日新聞社、pp.215～216、1941
- 15) 第三部特別委員会第二回会議にて公表された。
- 16) 注10)と同じ。
- 17) 1931年7月に開催された「山の座談会」に関する報告。出席者は登山家や公園行政関係者が含まれ、小島烏水や東京営林局本多静六らがいた。前掲書5)、p.229
- 18) 前掲書3)
- 19) 同上。
- 20) 同上。
- 21) 上高地一帯は営林署の管轄だったため、許可がない限り新たな宿泊施設の開設は困難だった。そのため三軒の旅館の寡占状態にあり、宿賃は高値であった。
- 22) 第二部国際観光委員会第二回会議中で、大倉は湿気の多い上高地でのキャンプは腹痛をおこしやすいうえ、また、彼らは周辺にゴミを散らかし、草を踏みじるとした。従って、キャンプを行う客層が多い若者を収容するための低廉な宿泊施設を確保すべきだとした。後に、上高地ホテルのスケジュール・ルームとして実現された。
- 23) 大倉は後の大蔵省預金部資金低利融資による14のホテル建設事業の、およそ3分の1に当たる5つのホテル建設に関与した。運輸省鉄道総局観光課：日本ホテル略史、1946
- 24) ちなみに、国立公園行政側では、上高地の道路整備は「梓川沿ヒノ自動車道路ヲ延長シ、大正池上流ニアリテハ兩岸二分シ、河童橋ニテ会」すのが適切とされた。国際観光委員会の議論と歩調が揃っていることがわかる。前掲書7)
- 25) また、新井の言動から判断する限り、彼が石垣知事と大倉にホテル建設への協力要請をするよう進言した可能性も否定できない。
- 26) 1936年より上高地帝国ホテルと称す。
- 27) 犬丸徹三：ホテルと共に七十年、展望社、pp.244～245、1964
- 28) 同上。
- 29) 大蔵省預金部資金を地方自治体が建設するホテルに限り融資する制度で、その計画をホテル調査会、運用委員会等が審議し、地方自治体に融資された。1932年から5年間に14事業、総額515万円が融資され、静岡県(川奈ホテル)、名古屋(名古屋観光ホテル)、栃木県(日光観光ホテル、現中禅寺金谷ホテル)、長崎県(雲仙観光ホテル)等がある。世界交通文化発達史、東京日日新聞社、pp.602～603、1940
- 30) 帝国ホテル：帝国ホテル百年史、p.317、1990
- 31) 国際観光局編：国際観光事業概説、付表第七表、1934
- 32) 前掲書27)、p.247
- 33) 前掲書30)、pp.316～317
- 34) 前掲書27)、p.246
- 35) 中ノ湯から上高地ホテルまでの区間の大半が県の施工によると思われる。
- 36) 前掲書27)、p.248
- 37) 大屋義人：信州観光読本、長野新聞社、1937

[1997年6月11日原稿受理 1997年9月1日採用決定]